

昭和30年代同窓会の思い出

私が神戸に帰って来た昭和33年頃は、まだ同窓会支部は出来ておらず、何か事があればお互いに連絡し合っ
て集まり歓談していました。特に学園関係者が来県され
た機会に集まることが多く、なかでも鞍田純先生を囲ん
で語り合うことがしばしばでした。

主なメンバーは、栗山 要（1期卒）
河合寅男（2期卒）、加藤信二（5期
卒）、山下優勝（5期卒）、橋本清伯
（6期卒）、足立 優（7期卒）、吉備
弘子（9期卒）等の諸氏で、会場は
戸市山手の山本通りにあった翠甲苑
（地方公務員の保養施設）や元町の
大野旅館等でした。



当時、栗山さんは県農業振興協会で月刊農業雑誌「経
営と生活」の編集長を務めておられ、県下の農業事情に
よく通じておられました。河合さんは小野市で酪農を経
営しておられたので、毎回と言う訳にはいきませんで
したが、その真摯な取り組みにはみな敬服したものです。
加藤信二さんは県庁で農林部に在籍、職員組合の農林部
会長でもありましたし、山下さんは明石の農業試験場で
病虫害の研究に当たっておられました。橋本さんは神戸
の青果市場に勤務されていましたが、間もなく独立して
明豊商事KKを立ち上げ、青果物の貿易で成果をあげて
おられました。一方で橋本さんは腕利きのハンターで、
シーズンになると猪や鹿を追って県下の山々を東奔西
走されていたようです。足立さんは農林中金神戸事務
所に勤務、よく割引農林債権（ワリノー）を勧められた
ものです。当時私の月給は手取り7千円、それをやり繰り
して額面1万円の債権を買うのですから大変でした。吉
備さんは県庁農林部の普及課におられました。やがて
結婚され京都に移られました。

この他農業試験場（食品加工）に伊福 靖氏（4期卒）
がおられましたが、間もなく和歌山県経済連のミカンジ
ュース工場に転出、農学博士の学位を取得されました。

また、当時全購連（現全農）大阪支所で兵庫県を担当
しておられたのが岸岡 昇氏（7期卒、豊岡市出身）で、
学生時代は足立さんとよきライバルであったと聞いて
いました。岸岡さんは鯉淵学園入学前に「地上」文学賞
に応募して入選、学園でも話題になっていたそうです。
私は岸岡さんを足立さんのところに案内して、学生時代
以来久々の歓談の機会をもったことがありました。

さて、みんなで集まった時には、加藤信二さん、橋本
さん、足立さんなどの間でケンケンゴウゴウの議論が圧
巻で、それをうまく捌いておられたのが栗山さんでした。
加藤信二さんは鯉淵で自治委員長を務められた闘士で

もあり、学園西寮一号室（自治委員長室）には加藤信二
さんの筆で「保守反動」の文字が墨書されていたそうで
す。その加藤信二さんに言わせると、足立さんは農林中
金をバックにした資本家の手先と言うことになり、それ
に橋本さんの大言壮語の横槍が入るといふ具合です。と
もかく3人の話は時間の経つのを忘れさせてしてくれ
ました。聞いておられた鞍田先生が、「橋本君の話は、ど
こまでが本当のことか分からない」と苦笑されていたこ
とを思い出します。50年前のなつかしい思い出ですが、
すでに何人かの方は鬼籍に入られてしまったのは誠に
寂しいことです。

こういう時代が何年か続いて、同窓会支部として組織
が確立したのは30年代の終わりか40年代の始め頃だっ
たと思います。（加藤 整 10期卒）

頑張っています！同窓生

今回は小島好文さん（11期卒）、中嶋則子さん（15期
卒）、三宅栄史さん（21期卒）、黒坂勝則さん（30期卒）
を取材させていただきました。

病気を克服して元気一杯

小島好文さん（11期卒）



大変お元気そうな小島さん

暖かい陽射しが春を感じさせる3月15日、神戸市営西
神・山手線に乗り、西神南駅で下車して、神戸市西区井吹
台東町にお住まいの小島好文さん（11期卒）をお訪ねしま
した。途中の街路樹の一角に、木蓮がひとときわ白い大きな
花びらを咲かせているのが印象的でした。ご自宅をお訪ね

しますと、奥様に迎えていただき、早速応接室で取材をさせていただきます。

小島さんは、徳島県阿南市のご出身で地元の高校を卒業後、農業改良普及所の紹介で鯉淵学園を知り、昭和29年に鯉淵学園農業経営科に入学されました。入学当時の学園長は尊敬する小出満二先生でありましたが、2年生の春に小出満二先生が残念ながら亡くなられたそうです。また、恩師石橋先生から農業経営論を教えていただき、時には先生から叱咤激励された記憶があり、とても感謝していると話されていました。学生時代の懐かしいお話を聞かせていただくと、小島さんは入学と同時に相撲部に入部し、国技館で学生相撲大会にも出場された経験があるそうです。毎月の親からの仕送りでは足りず、学園近くの農家に落花生やサツマイモ栽培のアルバイトに出かけて、稼いだお金で学費や遊興費に使っていたそうです。



学生時代のアルバムを手に



奥様と仲良くハイポーズ

昭和31年に鯉淵学園を卒業後、タケノコ出荷組合長であった父親の知人の紹介で、神戸青果株式会社に就職され、野菜部に配属されたそうです。入社当初、社員数は350名、年商300億円で、小島さんの給料は6,900円だったそうです。毎日、早朝3時30分～4時に出社し、野菜の競り人として野菜の販売促進、全国各地の生産地に足を運び産地指導に務められ、34年間の長きにわたり活躍されました。また日本経済が高度成長を迎えた頃から消費者の食生活が大きく変化し、大型野菜だけでは消費者ニーズに応えることができなくなり、行政や生産者団体に対して菊菜、小松菜、青梗菜、水菜、青ネギなどの小物軟弱野菜栽培を強く推奨されました。このような小島さんの長年にわたる野菜販売促進と産地指導が評価され、神戸青果株式会社を始め、神戸市長、農業協同組合長からの多くの感謝状や表彰状が授与されています。しかし、「昭和44年に深江浜に東部市場が出来て、その場所に野菜部が移動した時は大変だった。また淡路島の白菜が病気にかかり、仲卸業者や小売業者から苦情が殺到したことがあった」と苦い思い出を懐かしく話されていました。

小島さんは、平成4年3月に青果会社を定年退職されました。その3年後の平成7年に神戸淡路大震災が発生し、当時住んでおられた神戸市須磨区の自宅で被災されました。その後、神戸市西区桜が丘で新居を構え18年間、生活しておられましたが、小島さんが72歳の時に食道ガンを患われたそうです。健康診断で見つかり、初期症状だったため大事に至らなかったそうです。長時間に及ぶ難しい手術だったので、手術を担当された執刀医にはとても感謝されておられました。現在は娘さんのすすめで西区桜ヶ丘から現住所に移り、奥様とともにマンション生活をされておられます。

趣味をお聞きすると「昔は、貸切漁船で沖に出て海釣りをよくしていた。また市民農園での野菜栽培が楽しみだった」と懐かしそうに話されていました。

これからの暮らしをお聞きすると、「幼い頃から親父から人様に迷惑だけはかけるなとよく躾をされた。これからは女房と一緒に体をいたわり、人様に迷惑をかけずに一日一日を健康で長生きをすることかな」と話されていました。

最後に鯉淵の後輩、学生に対してご意見を聞かせていただきました。小島さんは、昨年11月に開かれた学園創立70周年記念大会に出席されました。その時に学生から受けた印象として、「昔の自分たちの時と違って、今の学生は礼儀正しく、年配の者に対する接し方が立派だ。よく教育されている」と話されていました。そして、卒業した後輩に対しては、「何の職業、仕事も真面目で真剣であること」、「今後の農業は流通面も心がけて取り組むこと」、「若者がグループ化して野菜づくりをしなければ産地は発展しない」と激励のメッセージをいただきました。

小島さん宅での2時間を超える取材でしたが、終始、熱心に質問に答えていただき、感謝の気持ちで取材を終えることができました。本当に有り難うございました。小島先輩、奥様とご一緒にいつまでもお元気で過ごしてください。

お手玉で笑顔を手から心へ

中嶋則子さん (15期卒)



普及センターの思い出を語られる中嶋さん

桜の開花宣言が各地で報じられる中で、寒の戻りなのか真冬のような寒さの3月24日、豊岡市気比にお住まいの中嶋則子さん（15期卒）をお訪ねしました。近くには城崎温泉、漁港、水族館（マリンワールド）、海水浴で賑わう気比の浜もあって観光地としても大変有名なところでもあります。ご自宅にお訪ねしますと暖かく迎えていただき、ご主人にご挨拶をしたあと、さっそく取材をさせていただきました。

中嶋さんは地元豊岡高校を卒業後、昭和33年に鯉淵学園生活科に入学されました。中学、高校では陸上部に所属し、100メートルハードルや走り高飛びで近畿大会に出場されたので、将来は体育大学に進学し体育の教師になりたかったそうです。ところが三姉妹の長女であったことや父親の推薦やその知人の紹介もあって鯉淵学園に入られたそうです。

当時のことを思い出しながら、「鯉淵学園にある茨城県までは、今のような新幹線もなく寝台列車で行くことが多く、両親は娘を海外にやるような気持ちではなかったのではないかな。また、山陰という山の中に住んでいた私は鯉淵の山のない大平野に驚きました」と懐かしく話されていました。

学生時代の思いでは、恩師である被服の久米先生や食生活の新井先生に大変お世話になったそうです。また食堂の献立に出てくる納豆が食べられず困った経験があるそうです。寮生活は楽しい思い出が多く、富士山登山、歌の会フォークダンス、北海道旅行など懐かしく話されていました。今でも同期生の絆は続いており、平成25年に兵庫県で2泊3日の女子会があり、宝塚歌劇団を観劇したり、豊岡の玄武洞やコウノトリを見たり、最後の夜は城崎温泉のあさぎり荘で思いっきり騒いだりしてとても楽しかったそうです。

中嶋さんは昭和35年に鯉淵学園を卒業され、同年6月に美方東部農業改良普及所に所属し、生活改良普及員として農村の食生活改善、生活改善グループの育成などに取り組みました。当時、中嶋さんがスクーターに乗って農村を走り回っていたので、「緑のスクーターに初めて乗った女性」と大変評判になったそうです。その後、平成63年まで村岡・香住・豊岡・和田山農業改良普及所を転任され、平成元年から平成10年までの10年間、福崎・浜坂・豊岡農業改良普及所の副所長として、管理職業務のほか新任普及員の育成や農産加工、棚田を活かす地域農業の活性化、女性起業への支援と組織能力の向上、心温まる交流型農業の展開、高齢者女性の起業家支援、女性農業士の誕生、管内で初めての家族協定の締結などに努力されました。中嶋さんは兵庫県職員（生活改良普及員）として務められた39年10か月間の業績が認められ、兵庫県知事賞、農林水産部長賞、協同農業普及事業会長感謝状など数々の表彰状、感謝状を授与されています。

平成11年に兵庫県を定年退職されましたが、その1年前から現場で働く女性たちが、ただ黙々と働くばかりでなく、これからの人生の中で心の底から笑ってほしいという思いが強くなり、そこで見つかったのが「お手玉」だったそうです。そして平成12年に豊岡市港地区で16人の有志によ

り「お手玉の会」を立ち上げた後、平成17年に「但馬お手玉の会会長&事務局」「日本お手玉の会理事」などを務められ、『お手玉で温もりを届けたい、手から心へ』をモットーに、但馬地区でお手玉リーダー研修会開催（10回）、JAたじま女性会お手玉大会開催指導（毎回200人で7回）、お手玉普及用読本の作成（1,000部）のほか、情操教育や生きがい活動、世代間交流で保育園、小学校、老人会や高齢者介護施設などに出向き、お手玉普及活動に取り組みられています。また近畿や全国規模のお手玉遊び大会にも参加して指導されています。中嶋さんは「お手玉は子供から高齢者まで脳の活性化と仲間づくりができ、笑顔に出会えることができる」とお手玉の魅力を語っておられました。



さすがにお手玉の先生です



カラフルなお手玉

また、中嶋さんはお手玉の普及とともに、豊岡市気比地区の民生児童委員として9年間務め、地域に貢献されたほか、「大石理久を忍ぶ歌の会」にも入会され、次世代に歴史を継承する活動にも取り組んでおられます。そして、時々、ご主人とともにグランドゴルフを楽しんでおられます。

今後の暮らしをお聞きすると、ご自身のライフワークとして、引き続きお手玉の会を通じて、リーダー養成や伝承活動に取り組まれるようであり、またご夫婦で但馬地区、京丹後市を日帰りで出歩きたいと話しておられました。共稼ぎの息子さんご夫婦と双子のお孫さんの2世代家族なので、「しっかりと家を守り、孫を見守るのが私たちの役目だ」と話しておられました。

最後に鯉淵の学生や卒業生に対して「昔の学生は旅をする時は遠慮なく先輩の家に立ち寄り泊めていただいたものです。後輩の皆さんも自由に訪問してください」と暖かいメッセージをいただきました。

中嶋さんとの別れ際に、「これ持って帰って」とお土産にお手玉と干し魚を頂戴いたしました。中嶋先輩のとてもお元気なご様子に気持ちよく帰路につくことができました。本当にご協力ありがとうございました。いつまでも、お元

気でご活躍されることを祈ります。

心が通う友人を大切に

三宅栄史さん (21 期卒)



つくしの里の看板の前で三宅さん

鮮やかな青葉に彩られた山々を見ながら県道 37 号線を車で走っていると、左前方に『三田・もち処 つくしの里』という大きな看板を見つけました。ここで働いておられる三宅栄史さん (21 期卒) をお訪ねして、事務所で取材をさせていただきました。

三宅さんは地元の高校を卒業後、昭和 39 年 4 月に鯉淵学園の園芸科に入学されました。入学された動機をお聞きすると、「高校の先生や親父に進められたので入ったが、高校では農業とは全く関係のない勉強をしていて大変戸惑った」と話されていました。鯉淵での思い出をお聞きすると、鞍田学園長が同郷であり、その娘さんが 1 期先輩だったので、色々なことでお世話になったそうです。また鞍田学園長が講義の中で「農政は農業の筏師である」と話されたことが今でも脳裏に残っており、当時はその意味すら理解できず、農業の専門用語には大変苦慮されたそうです。一般教養の中で英語は得意で、高石先生に代わって時々「ガリバ旅行」の教材にて学んだことが、唯一の楽しい授業だったそうです。

寮生活では部屋の先輩が演劇部に入っていたため、三宅さんも演劇部に入部されました。三宅さんは「舞台上『夕鶴』などを演じるために、毎夜遅くまで稽古等に励んだおかげで人間関係(女性)を学ぶことができた。今迄男子学生の中で育った私にとって新鮮で貴重な経験でもあり、その後の人生にとって財産になった。もちろん、よき先輩や後輩に恵まれたこともあるが、今でも永遠の友として指導をいただいている」と話されていました。そして「2 年間の学生時代に心が通う友ができたことが私にとって一番の誇りである」と話されていました。

昭和 41 年 3 月に鯉淵学園を卒業後、明石の農事試験場を経て、地元の三田市農協に就職されてから兵庫六甲農協で定年退職されるまで、一貫して営農事業一筋の農協マンの人生を歩まれました。兵庫六甲農協では営農経済事業本部

GM (ゼネラルマネージャー) と呼ばれる営農経済事業全般の統括責任者として活躍されました。農協職員時代に印象深く記憶に残っていることをお聞きすると、三宅さんは全国で最初に本格的農産物直売所を立ち上げたことだと話されました。農産物直売所を立ち上げた切っ掛けは、「元来、三田地域は国のレタス指定産地、その他ピーマンなどの都市近郊野菜産地として維持発展してきた。特に当地域は大規模なニュータウン開発に伴い、人口の日本一の増加率、併せて農家の大規模区画整備事業、ゴルフ場の開発等の就業機会が増え、年々農産物の販売が減少する中で、この危機感により新たな農業への転換を余儀なくされたからだ」と話されていました。

今では全国的に農産物直売所が設置され決して珍しくはありませんが、当時は、これまで経験をしたことのない取り組みの連続で、共撰をやめ、自己責任による農産物販売、又安全、安心な野菜の提供を地産地消という身土不二を基本理念に新しい住民をどのように定着させるかが問われたそうです。このような観点から三宅さんが中心となって農産物直売所設置の検討を始められ、平成 11 年に兵庫六甲農協農産物直売所『パスカルさんだ』が全国で始めて三田市内にオープンしました。この農産物直売所の検討の際には岩手県の同窓生を訪ねて必要な知識や技術を学んだそうです。その後、神戸市西区に全国最大級の大型農産物直売所『六甲めぐみ』、伊丹市にファーマーズマーケット『スマイル阪神』を設置されました。三宅さんは「自分の力など微々たるものだ。優秀な部下に恵まれ、彼らが一生懸命にやってくれたからこそできたのだ。そして、農協内はもちろんのこと、行政、商社、企業など多くの方々との心を通じた信頼関係があったからできたのだ」と話されていました。



店の玄関前で



店内に並べられた餅の加工品

農協を定年退職後、現役時に立ち上げた地元高平地区の羽束農産加工組合『三田・もち処 つくしの里』で管理運営を担当されておられます。この地域は古くから有数のもち米の産地として知られ、最盛期は「伊勢の赤ふくもち」の原料として栽培されてきました。現在は特産の「ヤマフクモチ米」が栽培され、『三田・もち処 つくしの里』で、この「ヤマフクモチ米」を 100%使用した無添加の餅を加工・販売しています。今年の 7 月には農産加工組合から農事組合法人に変えるそうです。

また、三宅さんは地元の集落営農『上槻瀬生産組合』(組合員: 42 人、面積: 30 ha、作目: 水稻・黒大豆・大麦) で副組合長・会計を担当されています。併せて年内に、高平地域内の 14 集落による 2 階建て方式の広域集落営農で農事組合法人が設立される予定であり、三宅さんはその準備委

員会で活躍されておられます。

趣味や今後の計画をお聞きすると、趣味はゴルフで、野球は阪神タイガーズのファンだそうです。これからは、余暇を利用して全国に散らばっている鯉淵学園の友人を訪問したいそうです。最後に、鯉淵学園の学生に対して「よく学び、よく遊び、そして心が通う友をつくってください」というメッセージをいただきました。

三宅さんは、『三田・もち処 つくしの里』の管理運営責任者という大変お忙しい立場であるにもかかわらず、約2時間の取材にご協力いただきましたことを感謝いたします。古希を過ぎても、気力が衰えずバイタリティー溢れる行動力に感動いたしました。帰り際に頂いた柏餅、あんだんご、苺大福は本当に美味しかったです。三宅先輩、いつまでもお元気で活躍されることを祈っております。

若い後継者に農業の魅力を

黒坂 勝則 (30期卒)



イチゴハウス内での黒坂さん

各地から梅の満開便りが聞かれる3月8日、豊岡市加陽にお住まいの黒坂勝則さん(30期卒)をお訪ねしました。豊岡市内に入り、蓼川大橋を渡り、しばらく走ると一面白いビニールハウスが広がっていました。黒坂さんの自宅を探していると軽トラックが通りかかりました。私を見つけて「神戸ナンバーだったので、すぐわかりました」と言われて、私を園芸ハウスに案内していただきました。イチゴを栽培されているビニールハウスの中で、取材に応じていただきました。

黒坂さんは、昭和48年に鯉淵学園畜産科(3年生)に入学され、昭和51年に卒業後、出身地の和歌山県にあるクミアイ飼料株式会社に就職、その後白浜にある「アドベンチャーワールド」にも勤務されました。昭和54年に黒坂さんの奥様がお住まいの豊岡市にいられて、6年間、城崎出石郡畜産農協連に勤務されました。畜産農協連を退職後、昭和60年頃から奥様の実家で農業に本格的に従事され、現在では専業農家として地域農業の振興に大変活躍されておられます。

農業経営の実情をお聞きすると、現在、水稻(コシヒカリ)が170アール、ビニールハウスが全体30アールで10本あり、春はイチゴ(紅ほっぺ)、夏はトマト(桃太郎)と胡瓜、秋はホウレンソウ、春菊を栽培されています。栽培した野菜は、豊岡中央青果株式会社に出荷され、大手量販店で販売されているそうです。黒坂さんは、この豊岡中央青果株式会社にある生産者友の会の会長を長年務められておられます。「最近、ようやく若い後継者が農業を継ぐようになってきたが、もっともっと若者に農業の魅力を知ってほしい。そのために我々がその道筋をつける責任もある」と話しておられました。

町内の役員などは既に退任され、町内行事などは近くにお住まいの息子さんが代わりに務めておられるそうです。お孫さんが5人おられて、子煩悩な黒坂さんという印象を受けました。趣味は海釣りで、毎年9月~10月に但馬の柴山漁港でアオリイカを釣るのが楽しみだそうです。

最後に、学生時代の思い出を話していただきました。当時の恩師として砂田先生や藤田先生のお名前を挙げられました。寮生活では東寮、筑紫寮に入られ、厳しくも充実した学生生活を過ごされたそうで、「全国に多くの友人がいることが私の財産である」と話されていました。また同期会や同窓会には参加したいが、農作業が忙しくてなかなか参加できないと話されていました。

帰り際に、黒坂さんから大きなイチゴをお土産に頂き、家族で美味しく食べさせて頂きました。家族は「近くの店で売っているイチゴとは違って、味が濃く甘くてこんな美味しいイチゴ食べたことがない」と大変好評でした。黒坂さんの益々のご活躍をご期待いたしております。



イチゴの出来具合をみている黒坂さん



美味しそうな「紅ほっぺ」

同期会の開催状況

第 11 期生

「卒業 60 周年・傘寿の集い」を開催



内原鉦泉・湯泉荘にて

11 期生会は近年 2 年毎に開催して来ました。今回の第 16 回は、平成 26 年の東京での集い（東京 KKR ホテル、出席 32 名）の翌年に開催しました。平成 27 年は学園の創立 70 周年記念の事業が実施されること、私共も傘寿を迎える記念の年でもあることを併せて祝し、これまでの集いの集大成にしようとの意のもとに開催が決まったものです。茨城県が幹事県（卒業生 5 名）になって計画と準備が進められ、11 月 27 日～29 日（2 泊 3 日）の日程で、宿泊は内原のなつかしいお風呂屋さんがりニューアルオープンした「内原鉦泉・湯泉荘」ということで実施をみました。出席者は 23 名、体調の不良、風邪などで出席を取り止めた方が数名あり、前回に比していささか淋しい会になりました。

第 1 日目は懇親会での近況報告、ご自慢のカラオケ、詩吟、ひょっとこ踊りなどで盛り上がり、最後に倉重夫人の日本舞踊（佐保流名取り・師範）を鑑賞したあと、円陣を組んで寮歌を高らかに熱唱して終了。

第 2 日目はバスで鯉淵学園へ。70 周年記念行事に参加、昼食は学園の厚意により提供された料理をおいしく頂戴したのち、同窓会大会に出席、夜は懇親会。

第 3 日目は水戸偕楽園散策、昼食後水戸駅にて解散。

11 期生会は第 10 回（平成 17 年、茨城）、第 16 回（平成 27 年、茨城）に卒業 50 周年、70 周年を記念してそれぞれ記念誌を作成（A4 判、約 60 頁）、何れもこの年次の幹事県となった茨城県の皆さんによる「集い実行委員会編」によるものです。一人一頁の体裁で写真も多く収載されているので、往時を偲び生涯の友に想いをはせることの出来る得がたい内容の冊子となっています。長く身近における記念誌の編纂にご尽力下さった幹事の方々に心より感謝しております。

加藤（塚本）定子 11 期卒

平成 28 年度入学式を挙行



近藤博彦学園長式辞

鯉淵学園は 4 月 6 日、平成 28 年度入学式を挙行しました。前日は小雨も降る肌寒い天候で入学式への影響が心配されましたが、当日は打って変わった晴天となりました。式典には水戸市長など多くの来賓や保護者が来られ、穏やかな日差しのもと、厳かに挙行されました。

今年度は、アグリビジネス科 21 名、食品栄養科 33 名の計 54 名が入学しました。入学生の出身地は青森から沖縄まで全国にわたっていますが、残念ながら兵庫県からの入学生はありません。また、この春鯉淵学園を卒業して研究科に進学する 3 名、そして研修科の「チャレンジ！ファームスクール」で研修を始める 3 名も同時に入学しました。

入学式後は学生食堂で会食をしたあと、学科ごとの説明会がおこなわれ、2 年間の学園生活がスタートしました。（この記事は鯉淵学園ホームページから一部転載いたしました）

訃報

井口善弘さん（16 期卒）が平成 26 年 3 月 10 日に逝去されました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記（平成 28 年 6 月）

熊本地震で亡くなられた方々にお悔やみと被災された方々にお見舞いを申し上げます。私は最後の農協科卒業生です。5 月 23・24 日、45 年ぶりにモデル農協のメンバー 6 人が香川県高松市に集まり、賑やかな同期会を開きました。その模様を次号に掲載いたします。同窓生の皆さん、支部だよりを充実するために、今後とも執筆・取材のご協力とご意見・ご感想をお寄せください。住所、電話番号、職業等の変更があれば必ずお知らせください。

編集者：福井寛行（26 期卒）

〒677-0038 兵庫県西脇市大垣内 44-2

TEL (FAX) 0795-22-1815 携帯 090-1022-2672

E-mail : hirokei-677@lime.ocn.ne.jp